

# 放送番組化されたソーシャルワーク実践の内容分析研究 — あるコミュニティにおける認知症高齢者問題解決事例から —

黒 木 邦 弘

## 要 約

本研究では、実在する認知症高齢者を対象とするソーシャルワーク実践の放送番組を内容分析した。その目的は、主要な諸コードを用いて事象を分類し、コード間の関係によって生成された意味作用を明らかにすることである。

放送番組化されたソーシャルワーク実践は、テレビジョンの主要なコードを用いた分類によって、一定の規則性をもって編集されていることがわかった。一方、コード間の関係では、当該事業所が典型的な介護サービスを提供している現実のなかにあつて、他とは異なる施設のこだわりをイデオロギーとして有していることを示している。「施設のこだわり」では、今日の介護サービス内容の社会的現実を批判的に思考するもので、あるべき現実を映像によって映しながら専門職としての価値を言い表している。こういった「施設のこだわり」は、当事者、家族、専門職の三者が連れ立ってコミュニティに働きかける行動に結びつき、問題解決に導いている。

ただ、一つ課題をあげるならば、番組では紹介されていない属性上の認識を指摘しなければならない。

最後に本研究の成果は、放送番組化された実践のなかでソーシャルワーカーが対峙する社会的現実とソーシャルワーカーが提起するあるべき現実といった着目すべき視点を明示したことにある。

## 緒言

75歳以上の高齢者人口が増加し、要介護高齢者が増加することは、同時に認知症を患う高齢者の増加を意味する。それは診断技術の進展や認知症を専門とする医療従事者の増加によって、たしかに認知症の早期治療は進展したし、進行を遅らせることはできるが、しかし現代の医学ではその完治は困難だからである。また認知症高齢者の問題は、人口の高齢化の社会的現実として、今後の高齢者の個別具体的な支援と身近な地域における社会資源の開発における福祉実践課題の一つといえるだろう。

ただ、この問題解決のこたえを保健・医療・福祉の専門職だけで考えることはできない。なぜなら認知症高齢者の日常生活の変化を早期に発見し、専門機関につなぎ、認知症に伴う徘徊や金銭等の搾取といった社会生活上の困難そのものに直接的、間接的に協力する地域住民の存在なくして実践は困難だからである。

医療保険制度や介護保険制度は、認知症高齢者の社会生活上の困難に対する有効で普遍的な対策ではあるけれども、しかしその対策だけで認知症高齢者の日常生活上のアドボケイトが実現できるわけではない。こういった現況に対して、2012年に策定された「認知症施策推進5か年計画」では、徘徊などの行動・心理症状等による「危機」が発生してからの「事後的な対応」が主眼であったケアから、今後目指すべきケアとして「危機」の発生を防ぐ「早期・事前的な対応」を基本的な考え方とする施策の推進に転換している（『平成25年度厚生労働白書』p.318）。ここで注目すべきは、認知症サポーターや市民後見人といった知識を身につけた地域住民による支援の強化である。つまり、近年の高齢者虐待事件が示しているように、専門職か家族かを問わず、認知症高齢者との直接的な人間関係の脆弱性を考慮すると「早期・事前的な対応」では家族以外の地域住民の認識は極めて重要といえる。とはいえ、認知症高齢者を病院や施設で長期にわたって隔離し、身体拘束を容認する地域住民の認識を繰り返してはならない。それは、認知症高齢者の人権を侵害するだけでなく、隔離と収容を是認する認知症高齢者言説を助長し、専門職と地域住民が協働する意味の醸成の妨げになるからである。もちろん H. M. Bartlett (1970) 以来、価値を専門的態度として行為化するソーシャルワーク実践が認知症高齢者のアドボケイトに機能してきたかと問われれば、優れた実践も個別性の高さゆえに再現困難で、しかも社会的発信の弱さも相まって共通認識されるまでに至っていない。そこで、注目したいのがメディアを通じて社会に発信されたソーシャルワーク実践である。それは可視化された問題解決事例であると同時に地域福祉のための教材になりうる。にもかかわらず何ら内容分析を経ないまま、意図的・目的的に用いられることもなく一回性の番組として消費されている。

本研究では筆者がソーシャルワーカーに協力し、二人の認知症高齢者の問題を専門職と地域住民の協働によって解決に至った実践の放送番組を取り上げる。なお、内容分析に際しては、メディア研究に詳しい守弘仁志氏の助言を得た。

## 1. 研究目的

本研究の目的は、テレビジョンで放送番組化されたソーシャルワーク実践を、その主要な諸コードを用いて分類し、コード間関係によって生成された意味作用を明らかにすることである。

## 2. 先行研究

### (1) ソーシャルワーク実践の放送番組化の意義と意味作用

#### 1) ソーシャルワーク実践の放送番組化に着目する意義

ソーシャルワーク実践がテレビジョンで放送番組化される意義を述べる。近年、日本では、実在する地域福祉実践者をモデルに、テレビジョンで映像化された放送番組が話題になった<sup>1)</sup>。一方、本研究で取り上げる放送番組は、こういった俳優を介在させた放送番組と明確に異なる。それは、実在するソーシャルワーカー、認知症高齢者当事者、家族、地域住民が実名で登場し、実践過程に取材班が同行するソーシャルワーク実践そのものを放送番組化しているためである。つまり、当該放送番組の映像は社会的に配信されたソーシャルワーカーの行為であり、かつ認知症高齢者を表象させる徘徊や暴言といった問題事象を解決した実践そのものである。

この研究の意義は大きく二つある。一つ目は実践を科学的手続きに則って内容分析することで、放送番組のアーカイブ化などによってその結果を他の実践にいかすことが期待できる。二つ目は、従来の事例研究では、研究者がソーシャルワーカーの行為をインタビュー調査に基づき文字データ化し、分析する方法が多用されていた。今回の映像化された事例研究では、映像媒体を用いることで実在する人物の表情や態度、障がいの状態や反応、語りの表現、施設の設備や周辺の風景など文字情報以外の複数の情報源を組み合わせた意味理解が可能となることである。

なお、既に述べたように、本ソーシャルワーク実践には筆者自身が協力者として関与している<sup>2) 3)</sup>。このようにソーシャルワーカーと研究者が実践自体を共有することで、一定の時間内の編集を余儀なくされる番組制作上の課題、さらに意味作用の考察の偏りを補えると考えられる。

---

1) 番組名「サイレント・ブア」NHK制作(2014年放送)が代表例。

2) 研究者がソーシャルワーク実践に協力する態度として、下田の以下の見解が参考になる。「社会的現実には現実に生きている人々の相互作用過程における人々の意味づけ、解釈の過程そのものにあると考えれば、当然のことながら、研究者はその人々の経験的世界に直接足を踏み入れて、その現場から概念化を図るべきで、あらかじめ研究者の側で概念図式などを用意すべきではないということになる」(下田 1994: 26)。

3) 実践に協力した研究者(筆者)の立場についてふれておく。本研究では、ソーシャルワーク実践の主唱者は研究者ではなくソーシャルワーカー自身であり、またコンサルタントも求められていない。よってソーシャルワーカーの研究者への期待は、互いの良さを統合することにあり協働者に近いといえる。また、研究者の役割では認知症高齢者に関する知識を有する専門職、家族、地域住民に当該実践でどういった発見があったかを適宜伝えるなど民衆教育者に近い役割を担った。こういった見解の参考にしたのが、公衆衛生分野で活用されてきた CBPR (community-based participatory research=コミュニティを基盤とする参加型リサーチ)に関する武田丈の文献である。以下、参考にした見解を紹介する。

研究者は、リサーチの部分では主唱者、コンサルタント、あるいは協働者のいずれかとしてコミュニティにかかわるが、それと同時に CBPR 全体のプロセスの中ではリーダー、コミュニティ・オーガナイザー、民衆教育者、参加型調査者という役割の1つ、あるいは複数进行を担うことになる(武田 2015: 53)。

## 2) 放送番組の生産と意味作用の生産の二重性

テレビジョンで映像化される事象の研究では、規則だった記号のシステムであるコードを利用して、コード間の関係に着目する。その主要なコードの1つがイデオロギー的コードである。イデオロギー的コードは、ソーシャルワーク実践の主要な鍵概念である価値を基礎づけるコードと大きく関係する<sup>4) 5)</sup>。

テレビジョンカルチャーの古典的文献とされるジョン・フィスク (John Fiske 1987=伊藤守ほか 1996:7) の文献によれば、テレビジョンで映像化される事象はコード化されているとして、「テレビジョンの諸コード」を三つのレベルの枠組みで捉えている。具体的には、外見や語りなどの現実をさす社会的コード(レベル1)は、カメラや音響など電子技術的コード化され、登場人物や場面など慣習的な表現的コード化(レベル2)を経て、個人主義や資本主義などイデオロギー的コード(レベル3)によって一貫性をもつものとして、社会的に受容しやすいものとして組織されていると述べる。

さらに、意味作用の考察においてもフィスクの以下の二つの見解が参考になる。

「意味生成の過程は、図のなかの諸レベルを横断する一定の動的過程を内包する。というのも、「現実」、表現、そしてイデオロギーが首尾一貫した自然な統一体として現れるときにのみ、意味が産出されるからである」(John Fiske 1987=伊藤守ほか 1996:9-10)<sup>6)</sup>。

「番組の生産とそこから生まれる意味作用の生産という、二つの側面を理解するためには、言説のはたらきを理解する必要がある。まさにそのこと自体、多義的な言説的意味合いを含んでいる。つまり、言説ということばの利用の在り方は、それが置かれている言説に従って変容するからである。…(筆者:中略)…言説とは、つねに話題となる重要な領域ごとに一貫した意味のセットをつくりだし、蓄積していくために、社会的に展開されてきた言語ないし表象の体系である。」(John Fiske 1987=伊藤守ほか 1996:23)。

以上の見解から次のことを確認しておかなければならない。本研究の目的は放送番組の生産それ自体の分析ではない。放送番組化されたソーシャルワーク実践が産出する認知症高齢者言説の意味作用

4) 価値の重要性を指摘した代表的な研究者がバートレットである。Harriett M. Bartlett (1970)、The Common Base of Social Work, NASW Inc. (H・M・バートレット著、小松源助訳(1978)『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房、32-58.)を参考にした。

5) ロウエンバーグ(Loewenberg)によれば、社会科学理論では「何であるか」のわかりやすい説明が試みられ、同時にイデオロギーでは「何であるべきか」を志向するとし、「理論は規則や関係の言説(statement)として形づくられ、同時にイデオロギーは価値を基礎づけられる。」と述べる(Loewenberg 1984:320)

6) 意味の産出に関連して、フィスクの次のような見解を課題として認識しておかなければならない。「分析の焦点は、われわれの分析の場合と同じく、番組のなかの一瞬一瞬の、きわめて小さな断片にまでおよぶ。この小さな断片を分析対象に据えることで、われわれは詳細な、かつ分析的な読みを行っていくことが可能になる。しかし、他方でそれは、物語のコードといった、より大きな領域に適応されているコードについて議論していくことを妨げることにもなる。」(John Fiske 1987=伊藤守ほか 1996:10)

の解明にある。それは、あるコミュニティ限定かもしれないが、地域住民がイメージし、不安を抱く認知症高齢者言説の変容にソーシャルワーク実践が資することを意味する。そして、実践に基づく意味作用の生成が、他のコミュニティの言説変容に影響を与えるとすれば、やがては意味作用の循環に通じると考える。

### 3. 研究方法及び倫理的配慮

#### (1) 研究方法

本研究の研究方法は、放送番組化されたソーシャルワーク実践の内容分析である。研究対象の番組名は、NHK 総合「福岡にんげん交差点『ずっと家族とこの街で～宅老所よりあいの日々～』(2009年放送)」である<sup>7)</sup>。番組の特徴は、冒頭でナレーションが言い表しているように「笑い声が絶えない小さな施設の日々を見つめました」といった認知症高齢者の自然な笑顔や笑い声の日常の意味に焦点を当てていることである。

研究手続としては、はじめに放送番組をテキストデータ化した。具体的には放送時間全体(25分:1500秒)が1場面当たり平均10.7秒、140場面で構成されていることに着目した。また、研究の分析枠組みは先述したフィスクの「テレビジョンの諸コード」(John Fiske 1987=伊藤守ほか1996:9-10)の三つのレベルを引用し、諸コードのうちいくつかを筆者が設定した(図1参照)。なお、独自に設定したイデオロギー的コードの下位コードについては本論に先行して考察しているので参考にされたい<sup>9)</sup>。

図1 テレビジョンの諸コード

- レベル1  
 現実: 登場人物の外見、行動、語り、身ぶり、表情(特に笑顔)、音声(特に笑い声)、  
 介護サービス場面(送迎、食事介助、移動介助)  
 上記の社会的コードは、以下のような技術的コードによって電子技術的にコード化されている
- レベル2  
 表現: カメラ①広角と表情の焦点化、②一対一の場面と集団場面)、音響(BGM①早い調子の曲、  
 ②ゆっくりした調子の曲)、ナレーション  
 この技術的コードは、さまざまな表現を構成する慣習的な表現的コードを伝える  
 たとえば、実践の展開、葛藤、登場人物、対話、場面など
- レベル3  
 イデオロギー: 上記の慣習的な表現コードは、以下のようなイデオロギー的コードによって一貫性をもつものとして、社会的に受容しやすいものとして、組織されている  
 たとえば、施設のこだわり、コミュニティの関心を触発・可動

出典: John Fiske, 1987, TELEVISION CULTURE—popular pleasures and politics, Methuen, London (=1996、伊藤守、藤田真文、常木瑛生、吉岡至、小林直毅、高橋徹訳『テレビジョンカルチャー』梓出版社, p.7) を参考に、黒木が本研究の結果に即して加筆等を行い作成。

以上をふまえ、番組を10秒毎に全140場面に分割して、①人物別の登場数（認知症高齢者、家族、ソーシャルワーカーら職員、地域住民）、②映像の構成（人物の笑顔など表情や動作、背景、字幕など）、③音声の構成（登場人物の語り、ナレーション、BGMなど）の各事項を目視にて確認して一覧に整理した。

## (2) 倫理的配慮

本研究の計画全体は「西九州大学倫理委員会」に申請し、書面及び面接審査の承認を得ている。一方、当該放送番組はすべて実名で登場し放送されているため、研究上の倫理的配慮として仮名を用いて匿名化した。但し、著作権に配慮して番組名は公表している。

## 4. 結果

放送番組化されたソーシャルワーク実践の内容分析の結果は、表2のとおりである。以下、(1)ソーシャルワーカーの属性、(2)二人の認知症高齢者の属性、(3)内容分析の結果の順に述べる。

### (1) ソーシャルワーカーの属性

当該放送番組をソーシャルワーク実践と規定するためにソーシャルワーカーAの学歴・資格・実務経験など属性を紹介する。A氏は50代の女性、福祉系大学卒業の学歴及び社会福祉士資格を有する。また認知症高齢者にかかわる実務経験は20年以上あり、認知症対応型の専門施設Q（通所介護とグループホーム）の管理者である（ただし、いずれも当時）。

以上、本論では学歴・資格・実務経験年数・役職などの属性からA氏をソーシャルワーカー<sup>8)</sup>と規定し、A氏による当事者、家族、地域の各対象への働きかけをソーシャルワーク実践とした。

### (2) 認知症高齢者の属性

二人の認知症高齢者の属性について、表1のとおり類似性と相違性にわけてまとめた。類似性では、性別、経済状況、利用する介護サービス、住宅、そして危機的状況を抱え込む主介護者の存在がある。

---

7) ただし、放送番組ではソーシャルワーク実践であることは強調されていない。後述するように実践者の属性、実践のレベルを勘案して筆者自身が規定したものである。

8) なお、放送番組ではA氏とは別に職員Bが登場する。B氏は二人の認知症高齢者の問題解決に一定の貢献をした人物である。ただし、本論では、B氏は管理者であるA氏のマネジメントのもとで実践に関与したと解釈し、A氏の見解を中心に論を組み立てた。

9) 『日本地域福祉学会第30回記念大会報告要旨集』(2016)、p.258。参照のこと。当該研究では、制度・政策に組み込まれた医学的診断に基づく認知症高齢者観から共感的な社会関係の蓄積によって紡ぎ出される新たな認知症高齢者観の創出を研究目的に、独自に設定したイデオロギー的コードを中心に考察した。



相違性では、年齢、BPSD（＝認知症の行動・心理症状）及び要介護状態、主介護者の同居状況、当事者の生活層による地域密着性の強弱、体型に分類できる。なお、地域密着性は、当該地域の居住年数や地域活動への参加状況を勘案して独自に設定した。

表1 「XさんとZさんの類似性と相違性」

	Xさん	Zさん	
類似性	性	女性	女性
	国籍	日本	日本
	地域・場所	政令指定都市	政令指定都市
	利用介護サービス	認知症対応通所介護	認知症対応通所介護
	経済状況	安定	安定
	主介護者	家族(長女)	家族(夫から長男へ)
	介護上の危機状況	危機(最大13時間の徘徊に伴う行方不明)	危機(主介護者(夫)緊急入院)
	住居	持ち家(但し、戸建て)	持ち家(但し、集合住宅)
相違性	年齢	80歳代	60歳代
	BPSD・要介護状態	徘徊、認知症あり、一部介助でほぼ自立	暴言・暴力、認知症があり、全介助
	主介護者同居状況	長女：敷地内同居	長男：県外(遠方)在住
	当事者の生活層による地域密着性	強い(元民生委員歴10年以上・リーダー的存在との評価あり、当該地域居住歴：長い)	弱い(転勤を伴う職業生活歴が長い・当該地域居住歴：短い)
	体型	細身	肥満(体重90kg)

作成：黒木(2016)

注：上記の情報は支援当時

また放送番組では、X氏の最大13時間の行方不明に至った徘徊行動が認知症の問題とされ、Z氏の大声をあげ、茶碗を投げ散らす暴言・暴力行動が認知症の問題として焦点化されている。いずれも認知症を表象させる代表的な問題であり、解決困難な事象といえる。

さらに番組内では明確に伝えられていない点を、以下のように先行研究（豊田・黒木 2009）ほかを参考に補足しておく。

- ① X氏の徘徊が通所介護サービス利用後の在宅時の早朝に発生すること。これはソーシャルワーカーが介護保険制度上の契約をこえた事態に対応していることを意味する。
- ② Z氏の主介護者の緊急入院時、近隣施設の短期入所介護サービスの予約が一杯で利用困難であったこと。これは普遍的なサービスがあっても利用困難な現実を提起している。
- ③ Z氏自身が自宅以外の場所へ移動して宿泊を伴う介護支援をうけることで一層混乱していたこと。これは危機介入時においても当事者の環境の変化に配慮した支援の必要性を意味する。
- ④ X氏からZ氏へとソーシャルワーク実践が連続していること。地域密着性の強いX氏の徘徊時の捜索には、X氏に近い人々が関与した。これらの人々が、地域密着性の弱いZ氏の在宅支援への協力の必要性を感受して行動したことを意味する。

### (3) 内容分析の結果 (表 2)

内容分析の結果を表 2 にまとめている。以下、その詳細を述べる。

表 2 放送時間・場面数/主なテレビジョンコード

		全体状況	登場人物などの個別状況	
放送時間		25分	X氏: 11分	Z氏: 14分
場面数 (%)		140場面	X氏: 32場面 (22.8%) 長女: 18場面 (12.8%) SWr※A: 29場面 (20.7%), 職員B: 31場面 (22.1%) ナレーション入り場面: 64場面 (45.7%)	Z氏: 30場面 (21.4%) 長男: 12場面 (8.5%)
テレビジョンコード	現実:「笑顔/笑い声」	45場面	X氏: 前半9場面、後半18場面	Z氏: 前半4場面、後半14場面
	現実:「介護サービス」	20場面	通所送迎: 1場面、食事介助: 7場面、移動介助: 11場面	
	表現:「カメラ」	140場面	クローズアップ: 61場面、一対一の会話: 46場面、広角: 17場面、 集団: 16場面	
	表現:「BGM」	50場面	早い調子の曲: 4場面 (番組オープニング曲) ゆっくりした曲: 46場面 (X氏の徘徊状態の語り、Z氏の見守り依頼、 X氏のハーモニカ演奏兼エンディング)	
	表現:「ナレーション」	64場面	前半: 25場面、中盤 11場面、後半 28場面	
	イデオロギー: 「施設のこだわり」	24場面	「古民家改築の建物」、「車椅子を使用しない」、「食事は普通食」、「食 事介助に1時間も2時間も時間をかける」、「徘徊しても拘束しない」	
	イデオロギー: 「コミュニティの関心を 触発・可動」	24場面	「13時間以上の行方不明」、「悩みを半分引き取ってもらう」、「家族や地 域の人たちとの間のクッション」、「地域の安心をつくる、希望につながる」	

作成:黒木(2016)

※SWr: ソーシャルワーカーを略記

#### 1) 均等に時間配分された番組構成

放送番組の時間配分は、登場人物別に大きく 2 つに分けて説明できる。1 つ目は、番組全体の放送時間 25 分が、二人の認知症高齢者の実践別にほぼ均等な割合で配分されていることである。具体的には、オープニングを含む X 氏事例の紹介時間が 11 分、施設設立の経緯及び番組全体をまとめるエンディングを含む Z 氏事例の紹介時間が 14 分となっている。なお、一画面平均 10.7 秒に対して、設立経緯の説明 [120 秒] 及びエンディングのソーシャルワーカー A の語り [60 秒] は平均を大幅にこえていることを付記しておく。

2 つ目は、当事者、家族、ソーシャルワーカー及び職員といった主な登場人物別に登場時間の割合が均等であったことである。具体的には、当事者と専門職がおのおの 2 割、家族が 1 割で番組が構成されていた。なお、人物の登場と関係なく 4 割強を占めていたのがナレーションである。ナレーションは、番組全体をガイドし、コード化された現実を説明し、そして映像・字幕と連動した場面の強調など構成上の重要な役割を果たしている。



## 2) テレビジョンの諸コードの全体概況

テレビジョンの諸コードとして、① 現実：社会的コードでは当事者、家族、住民等の「笑顔／笑い声」コードを映像で多用している。そのほか「介護サービス」コードとして、ソーシャルワーカーの所属施設が他施設同様に送迎など標準的なサービス提供を示していることを伝え、普遍的な社会サービスを表象させる。② 表現：技術的コードでは、カメラを用いて個人の表情や一对一の会話を焦点化し、BGM（バックグラウンドミュージック）を用いて番組全体をゆっくりとした曲調で平穏な空間を表現している。③ イデオロギー的コードでは、独自に2つのコードを設定した。1つ目は当該施設の独自固有の援助方針を言い表す「施設のこだわり」コードである。具体的には、ナレーションを用いて番組冒頭（放送開始2分から5分までの3分間）で集中的に紹介されている。2つ目は、認知症高齢者X氏の徘徊時の検索依頼やZ氏の支援会議など当事者、家族、専門職の三者が制度の限界や支援の協力を地域に働きかける場面を言い表す「コミュニティの関心を触発・可動」コードである。以下、各コードの意味を詳細に説明する。

## 3) 現実：社会的コード

### (A) 「笑顔／笑い声」コード

当該コードは、45場面（32.1%）／全140場面で確認できた。詳細には、X氏では前半9場面、後半18場面で確認できた。Z氏では前半4場面、後半14場面で確認できた。このことから本コードは両事例の紹介の後半に多用されている。「笑顔／笑い声」コードが示す「現実」は、前半ではX氏の徘徊やZ氏の暴言・暴力という深刻かつ危機的状況として表象され、後半では本人または周囲の自然な笑顔への変化を表している。

### (B) 「介護サービス」コード

当該コードは、20場面（14.2%）／全140場面で確認できた。詳細には、介護保険法に規定された指定通所介護施設に標準的な送迎サービス、食事介助や移動介助等の介護サービスで構成され、当該施設が標準的な介護保険事業所であることを表象している。

## 4) 表現：技術的コード

当該コードとして(A)「カメラ」コード、(B)「BGM（バックグラウンドミュージック）」コード、(C)「ナレーション」コードの三つを設定した。

### (A) 「カメラ」コード

「カメラ」コードとは「その場面の鮮明な映像を提供して、視聴者が完全な理解を得られるように、種々の角度からの描写や奥行きのある焦点設定をおこなう」とされる（John Fiske 1987＝伊藤守ほか 1996：10）。本番組では、場面数が多い順に人物の表情を「クローズアップ（焦点化）」61場面（43.5%）、次いで専門職及び認知症高齢者、専門職及び地域住民など「一对一の会話」46場面（32.8%）が多用される。その他、風景撮影のような「広角」17場面、広間に集まる高齢者及び職員

の談話、支援に協力的な地域住民との話し合いなど「集団」16場面が続いている。

なお、「クローズアップ(焦点化)」は、視聴者に親密度や敵意を抱かせる要素として利用される。本番組の場合、各事例の前半では不安や不満を表象し、後半では笑顔や笑い声を表象することで内面の変化を含意させ、親密度を示すコードとして多用される。

#### (B) BGM (バックグラウンドミュージック)

2つの場面を結び付けるBGM(バックグラウンドミュージック)は、長調や短調を駆使して曲を変化させ、場면을転換する(John Fiske 1987=伊藤守ほか 1996:13)。本番組では、場面と連動させて早いリズムで転換させるBGMはオープニング曲以外になく、ゆっくりしたリズムのみ確認できた。例えば、X氏の徘徊問題が顕在化し、職員Bが不安な心境を語る場面である(場面 No.45~46)。この場面では、以下のように、危機的状況を伝えるナレーション、職員の語り、語りの字幕、そしてBGMの4つの表現:技術的コードが同時に確認できる。

#### ナレーションの語り全文(No.45 場面)

##### ♪BGM 開始

「4年前、(実名:職員B)さんにとって忘れることができない事件がありました。徘徊の症状がある(実名:X)さんが一人で外に出てしまい、13時間以上経って、警察に保護されたのです。」



#### 職員Bの語り一部(No.46 場面)

##### ♪BGM 継続

「暗くなって懐中電灯で茂みの中を捜すときはもう気が気じゃなくてもう…(息を吸う)あの、もし見つかったてもですね、あの、茂みの中で倒れてたら、もう、どうしようもないことだったので、はい(以下、省略)」

※下線部は、職員Bの字幕化された部分をさす。

#### (C) 「ナレーション」コード

ナレーションは、全140場面の中で番組前半(25場面)・中盤(11場面)・後半(28場面)で適宜挿入され、番組全体を通じて重要な役割を果たしている。

前半では、後述する「施設のこだわり」コードを連続的かつ簡潔に紹介している。中盤では、職員Bの属性紹介と試行錯誤の実践を表象しながら以下の三つ場面をつないでいる。一つ目は職員B、X氏、X氏の長女の三者で構成される支援体制を強調している。二つ目は、三者が揃って地域住民にX氏の徘徊時の早期発見を働きかける具体的な行動である。三つ目は、X氏の長女の心境の変化である。

後半では、管理者であるソーシャルワーカーA(以下、SWrA)の事業創設当時の紹介を挟んで、Z

氏の危機的状況を紹介しながら以下の四つの場面をつないでいる。一つ目は、SWrA、Z氏、Z氏の長男の三者で構成される支援体制を強調している。二つ目は、夫の緊急入院によって单身になったZ氏を地域で見守る話し合いを実施し、二か月程度を支える具体的な行動である。三つ目は、Z氏が地域の協力者に笑顔で自ら協力を依頼する当事者の変化である。四つ目は、「介護はずっと綱渡り」といったZ氏の長男がZ氏の受入施設を遠方で確保するという残された課題を示している。

以上、ナレーションに共通するのは次の三点である。① 専門職が当事者及びその家族の三者で話し合いを重ねて行動を共にする当該実践上の原則の表象化である。次に、② 生命や生活の危機的状況を乗り越えるためには地域の協力が不可欠で、地域に対して協力を働きかける具体的な行動の表象化である。そして、③ 認知症高齢者を抱える家族の苦悩である。

### 5) イデオロギー的コード

当該コードとして、(A)「施設こだわり」コード、(B)は「コミュニティの関心を触発・可動」コードを独自に設定した。

#### (A)「施設のこだわり」コード

本コードは、既述のようにナレーションを多用し、ソーシャルワーカーの所属機関の方針を含意している。具体的には、以下のとおりである。

- (a-1)「古民家改築の建物」
- (a-2)「車いす使用をしない」
- (a-3)「食事は普通食」
- (a-4)「食事介助に1時間も2時間も時間をかける」
- (a-5)「徘徊しても拘束しない」

ナレーションでは、「最も大きな特徴」として認知症高齢者の徘徊対応を紹介している。映像ではカメラ前を行き来し、ガラス戸をあけようとするX氏に、職員Bが一対一で対応している様子が紹介される。

#### (B)「コミュニティの関心の触発・可動」コード

本コードの特徴は、一場面を平均10.7秒で展開する番組全体の構成にあって、一場面に約30秒を費やしている。該当する全7場面にはX氏、X氏の長女、Z氏の長男、ソーシャルワーカーA、職員Bがそれぞれ登場する。そのいくつかを例示する。

#### (b-1)「13時間以上の行方不明」～生命を守りきれない

職員Bは、徘徊によって生命の危機に直面したX氏の支援を振り返り、当時の心境を語る。そして、以下のように述べ、個別の問題が提起する社会の問題を表明している。

職員 B の語り部分 (場面 No.51 : 約 30 秒)

「これはもう一、家族だけだったりとか、「(事業名)」だけだったりとか、そこだけで考えていく問題ではなくて、みんなに一あの協力を呼びかけながら、みんなでちょっと取り組んでいかないと (X さん:実名) 自身の安心安全、んー、命をちょっと守りきれない、というのを投げかけて取り組んでいこうと思いました。」

※下線部は、職員 B の表情と語りに加えて字幕化された部分を指す。

この対象認識から以下の 2 つの価値がうかがえる。1 つ目は、徘徊を生命の危機に通じる問題として捉え、通所介護施設の機関の機能を超えて取り組む必要性である。2 つ目は、元民生委員の X 氏の地域への貢献に着目して、家族だけの問題とせず、地域の問題として捉えなおす必要性である。

(b-2) 「悩みを半分引き取ってもらう」

X 氏の長女が、X 氏、職員 B と三者で地域に協力を呼びかけたことで気づいたことを語っている。

X 氏の長女の語り部分 (場面 No.67、約 40 秒)

「皆さんが心に留めておいてくださって何かの折に声かけて、頑張ってるね、とか大丈夫よ、応援するよ、って言うてくださったらすごく心が楽になったんですよ。だから、そんなので、ああ～、人になんか悩みを半分引き取ってもらったみたいで、すごく自分の気持ちが軽くなりましたから」

※この場面では字幕はなし。

この語りから介護家族の悩みが地域の応答によって軽減されていることがわかる。これは、家族が地域に直接はたらきかけなければ得られない気づきといえる。

(b-3) 「家族や地域の人たちとのクッション」

ソーシャルワーカー A は、認知症高齢者のおかれた社会的状況を評価し、仕事として関わる自身の役割を以下のように表明している。

ソーシャルワーカー A の語り部分 (場面 No.75、約 30 秒)

「最終的には、老人ホームなかなか入れませんから、当時も今もそうですけど、もう順番待ちで、すぐになかなか入れない。私たちがみたいに仕事でやる人間は、その家族や地域の人たちとのこう、クッションですね。間に入って、こういう場所に皆さんに来ていただいて、で、集ってできるだけそこで一回でも二回でも笑う時間 (笑みを浮かべ) が多ければ、(笑顔で頷きながら) 皆さんねえ、比較のお元氣になれますし (二回頷く)

※下線部は、SWrA の表情と語りに加えて字幕化された部分を指す。

この対象認識から以下のことがうかがえる。ソーシャルワーカー A は、慢性的な老人ホームの入所待機状況を認識し、自分たちの役割を認知症高齢者と家族、地域との「クッション」と表現してい

る。また、認知症高齢者が集まる場と「笑う時間」が多く設定されることで、皆が元気になるといった経験的認識に基づく主観的な評価基準を表明している。

(b-4) 「地域の安心をつくる、希望につながる～人が集まるちょっとした積み重ね」

番組の最後でソーシャルワーカー A は、2 事例の実践を総括的に語っている。それは、以下のよう  
に社会的問題と社会的孤立を関連づける内容である。その上で、顔も知らない他者が集まることの  
積み重ねが、地域の安心、希望につながるといった世界観を表明している。

ソーシャルワーカー A の語り部分（場面 No.128、60 秒）

(BGM ♪) 「介護問題にしろ、老後問題にしろ、なかなか安心が保証されてない。だからそう  
いう時にどうしても人はこう、想像しただけで孤立し、孤独だったり孤立したりね。皆一人ひ  
とりばらばらになってしまう。顔も知らないんだけど、一人じゃちょっと無理だけど、20 人  
寄せばなんとかできるんじゃないかとか。それが 30 人になると、もっと楽になるよ、とか。  
40 人になったら、もうちょっともっともっと楽になるよ、という。こういう世界をちょっと  
したことなんですけどね、ちょっとした積み重ねなんですけど、なんかそういうことが確実に、  
あの～、地域の安心をつくれるみたい。こう、なんかそういう希望につながっていますよね  
今。(頷く)」(BGM 終わる)

※下線部は、SWrA の表情と語りに加えて字幕化された部分を指す。

## 5. 考察

本放送番組では、認知症高齢者の現実【レベル 1】を徘徊や暴言といった行動ではなく、自然な笑顔や笑い声といった表情に着目してコード化している。また表現【レベル 2】では、①当事者、家族、ソーシャルワーカーの主要な三者が偏りなく均等な時間配分で登場するよう編集され、②危機的状況下の苦悩と問題解決場面の当事者の笑顔を対照的に扱う構成になっている。そしてソーシャルワーカーが実践で重視する価値を基礎づけるイデオロギー【レベル 3】では、他の施設にはないソーシャルワーク専門職及び専門機関としてのこだわりや、コミュニティの関心を触発する役割を示すことで、コミュニティ側の行動の変容を促す実践上の工夫をコード化している。

これら 3 つのレベルのコード化によって映像化された事象は、認知症では常に話題になり、かつ認知症を強く表象させる徘徊や暴言・暴力などの行動そのものではなく、笑顔の意味をどのように捉えるかに視点がおかれている。この意味の解釈の前提には、普遍化された介護サービスへの批判がある。それは普通の食事を口から食べること、車いすではなく可能な限り自分の足で歩くこと、オムツではなくトイレで排泄すること、そして徘徊しても行動を抑制しないことを専門職・専門機関としてこだわることの大切さである。管理者でもあるソーシャルワーカー A の所属機関の理念に、「あなたの笑顔は私の元気」といった言葉がある。認知症高齢者からこぼれる自然な笑顔の意味とは何か。一回で

も多く笑顔がみられる支援の質の高さ、そして家族、専門職、そして地域住民が笑顔で語りあう自然な映像には、主観的ではあるが、俳優によるドラマにはない発信力を内包している。

## 6. まとめ

放送番組化されたソーシャルワーク実践は、テレビジョンの主要なコードを用いた分類によって、一定の規則性をもって編集されていることがわかった。例えば、人物たちは基本的に均等に登場し、各事例の前半では認知症高齢者の徘徊や暴言・暴力といった表象を強化し、後半の認知症高齢者の笑顔や笑い声といった表象を軟化させる構成上の工夫がある。

一方、コード間関係では、当該事業所が典型的な介護サービスを提供している現実のなかであって、他とは異なる施設のこだわりをイデオロギーとして有していることを示している。施設のこだわりでは、今日の介護サービス内容の社会的現実を批判的に思考するもので、あるべき現実を映像によって映しながら専門職としての価値を言い表している。こういった施設のこだわりは、当事者、家族、専門職の三者が連れ立ってコミュニティに働きかける行動に結びつき、問題解決に導いている。

ただ、一つ課題をあげるならば、番組では紹介されていない属性上の認識を指摘しなければならない。それは、X氏が元民生委員として地域に貢献してきた生活歴を有し、多様な社会関係のなかで地域生活を送ってきたことである。ソーシャルワーカーは、こういった生活歴に価値を見出し、支援の原理として専門職や地域住民にその意味を問いかけ、さらに共に行動をおこすように働きかけている。さらに、X氏の実践によってえられた支援の原理は、暴言・暴力を表象させるZ氏の支援に応用され、地域と接点のないZ氏に対して、地域住民、所属機関が利害を超えて結びつけるかを問いかけた。

いずれにせよ、二つの問題解決事例は、一つの実践の意味作用の生成が他の実践の意味づけにつながり、循環していく可能性を内包している。最後に本研究の成果は、放送番組化された実践のなかでソーシャルワーカーが対峙する社会的現実とソーシャルワーカーが提起するあるべき現実といった着目すべき視点を明示したことにある。

今後は、放送番組のアーカイブ化によって当該ソーシャルワーク実践を、他の認知症高齢者の問題解決に悩む地域に教材として活用するなどできないものかと考える。一方、ソーシャルワーク実践の放送番組化は、テレビジョンの映像化に関わる制作者との価値の共有、個人情報に関わる実践者と研究者の倫理的な問題など乗り越えなければならない新たな課題も提示している。増加する認知症高齢者の人権と普遍化されたサービスの質の向上に資する観点からこういった課題の検討を前に進めたい。

## おわりに

本研究では、メディア研究を専門とする守弘仁志氏に、第三節第一項の研究手続きに関わる内容分

析のデータベースの作成段階で助言をいただいた。心から感謝申し上げます。

#### 引用文献・参考文献

- ・ 阿呆順子 (2011) 「認知症の人から見える世界」『日本保健福祉学会誌』 Vol. 17, No. 2:1-9.
- ・ Jack Rothman, John L. Erlich, John E. Tropman (2001) Strategies of Community Intervention 6th-edition, *F.E. Peacock Publishers, Inc.* : 59-61.
- ・ John Fiske (1987) TELEVISION CULTURE-popular pleasures and politics, Methuen, London (=伊藤守、藤田真文、常木瑛生、吉岡至、小林直毅、高橋徹訳 (1996) 『テレビジョンカルチャー』 粹出版社 : 7-124).
- ・ F. M. Loewenberg (1984) Professional Ideology, Middle Range Theories and Knowledge Building for Social Work Practice, *The British Association of Social Workers*, 14 : 309-322.
- ・ H. M. Bartlett (1970) The Common based of Social Work Practice, *National Association of Social Workers Inc.* : 62-83.
- ・ 平塚良子 (2011) 「ソーシャルワーカーの実践観—ソーシャルワークらしさの原世界」『ソーシャルワーク研究』 36 (4) : 60-67.
- ・ L. C. ジョンソン、S. J. ヤンカ、山辺朗子、岩間伸之訳 (2004) 『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』 ミネルヴァ書房 : 76-77.
- ・ 下田直春 (1994) 『社会理論と社会的現実—社会学的思考のアクチュアリティ—』 新泉社 : 26.
- ・ 武田丈 (2015) 『参加型アクションリサーチ (CBPR) の理論と実践—社会変革のための研究方法論 (関西学院大学研究叢書第 168 編)』 世界思想社 : 50-53.
- ・ 豊田謙二・黒木邦弘 (2009) 『「宅老所よりあい」 解体新書』 雲母書房 : 170-178.